

雲棲株宏の教學

增水靈鳳

〔一〕

雲棲株宏の傳は雲棲法彙第三十四冊の塔銘行略及び五燈會元續略二卷下、五燈嚴統十六卷、五燈全書百二十卷、續燈存稿十二卷、高僧摘要一卷、釋氏稽古略續集三卷、補續高僧傳五卷、淨土聖賢錄五卷、淨土晨鐘十卷等に載せられてゐる。株宏字は佛慧、別に蓮池と號した。俗姓は沈氏、杭州仁和（浙江省杭州府仁和縣）の人である。嘉靖十四年乙未年（明世宗代、西暦一五三五年）七月十四日を以て生る。十七歳にして諸生に擧げられ、其の德行文章兩つながら群を抜いてゐたといふ。而も名譽紛華に於て澹如たるものがあつた。隣家の老嫗に教へられて、心を淨土に傾け、常に生死事大の四字を案頭に書して自ら警策した。二十七歳父を失ひ、三十二歳亦母を失ふや、風木の悲みに堪へず、遂に繼室に別れて、天理和尚に投じて落髮した。更に昭慶の無慶玉律師に請うて受具、出でて諸方に歴參し、次で京師に入り、徧融禪師に謁した。禪師示すに「名を貪り利を圖るを要せず、唯一心に辨道し、老實に持戒念佛せよ」との言を以てした。去つて又笑巖德寶禪師に見え、法門の開示を求めた。寶曰く「咄汝三千里外我に開示を求む。我に甚麼の開示かあらん」と。宏、恍然として辭し、東昌（山東東昌府）に向ふに途上譙樓の鼓聲を聞き、忽然として省發した。時に偈を作つて、「三十年前事可_レ疑、三千里外遇何奇、焚_レ香擲_レ戟渾間事（一本如_レ夢）、魔佛空爭_ニ是與_ニ非」

と述べてゐる。隆慶五辛未年（明穆宗代、西暦一五七一年）三十七歳の時、杭州に歸り、雲棲山の山水幽絶なるを愛し、伏虎志逢禪師の廢寺に居をトした。或は瑜伽餸口を誦して虎患を滅し或は佛名を稱して大旱を救ふ等福利を増大する所又少くなかつたといふ。仍つて里民是れを悦び、材を致して廢寺を復興した。宏は天性簡淡にして縁飾なく、虚懷にして物に應じ、形貌溫粹、而も自ら守ること峻厳なるものがあつた。論を立つるや嚴正精微、貴顯大官と語るも侃侃として毫も屈する所がなかつた。故に彼の道譽を慕ふ者、爭つて其の門に輻湊し、遂に一大叢林を成すに到つた。^{*12}宋應昌、陸光祖、張元忭、憑夢禎、陶望齡、虞淳熙等一時の賢豪心折歸伏する者甚だ多數に上つた。

宏の教學は各般に涉つてゐるが戒壇の復興を圖り、戒律の軌範を定めたことは其の特色の一である。乃ち求むる者をして三衣を具し、佛前に於て戒を受けしめ、或は大衆をして梵網菩薩戒經及び比丘の諸戒品を誦せしめ、或は自ら沙彌要略、具戒便蒙、菩薩戒疏發隱、誦戒儀戒、尼戒要等を著し、其の依る所を明らかにした。又水陸儀文及び踰伽餸口の法を一定して幽冥の苦患を拯ひ、寺前及び城中に放生池を作り、戒殺生文を撰して殺生を戒めた。

更に淨土の法門を唱へ、末法思想を強調したことは其の特色の二である。乃ち阿彌陀經疏鈔、往生集等を著して事理を融會し、旨を唯心に歸した。思ふに彼は戒律を堅持し念佛を精修したが其の嵩尙する所は華嚴の法門に存したやうである。

最後に禪門の宗風を擧揚せんと努めたことは其の特色の三である。乃ち禪關策進を編し、古德の示衆行履等を錄し、以て參禪學道の士を策勵した。是を以て見るに彼は明かに禪淨二業を雙修し、是等を一心の融合に歸せんことを教へた人であると言はねばならない。

道風四方を風靡するや、光宗の生母慈照皇后師の放生文を讀んで大いに是れを嘉嘆し、内侍を遣はして、紫袈裟及び齋資を賣して往いて供養し、以て法要を問はしめた。晩年疾を得るや益々淨業を勵み、三十二條の不祥を作つて自他を誡め、又三可惜、十可歎を書して大衆を督する所があつた。終焉に臨んで更に大衆老實に念佛して涅槃することなく、又我が規矩を壞ること勿れと遺教し、西面念佛して遂に入寂した。時に萬曆四十三乙卯年（明神宗代、西曆一六一五年、但し淨土聖賢錄五卷は萬曆四十年）七月四日である。世壽八十一歲法臘五十年、宏著はす所の書は華嚴經感應略記以下三十一部四十四卷に及んでゐる。後王宇春其等を蒐集して雲棲法彙三十四冊となし、一般に世に行はれてゐる。尙ほ禪師の傳記及び思想に就て望月信亨博士の淨土教の研究¹⁴、故忽滑谷快天博士の禪學思想史下巻等は参考とすべき文献である。

註 *1 繼藏一輯二編乙十一套五冊四六九丁右 *2 繼藏同上十二套四冊三六八丁右

*3 繼藏同上十五套一冊一〇〇丁右 *4 繼藏同上十八套一冊一四一丁右

*5 繼藏同上二十一套四冊三四五丁右 *6 大正藏四十九卷九五二頁

*7 繼藏同上七套一冊五五丁左 *8 繼藏同上八套四冊一四五丁左

*9 繼藏同上十四套二冊一五四丁左 *10 淨土聖賢錄五卷「鄰有老嫗曰誦佛名數千、問其故、嫗曰、先夫持佛名、臨

終無病、與人一拱而別、故知念佛功德不可思議」*11 淨土晨鐘十卷辨融に作る

*12 淨土晨鐘十卷參照

住、衣奉高閣、未笄挂體」

*13 淨土晨鐘十卷「萬曆中慈聖太后遣中貴、詢法賜紫衣黃金使者出金歸常

*

14 同書五五〇—五六一頁

〔二〕

株宏は前述の如く禪淨雙修の人であるが淨土教に關する見解は主として阿彌陀經疏鈔に見出し得るであらう。而して其の一卷に從へば彼は如來が淨土の法門を開演せられた理由として次の十義を擧げてゐる。

- (一) 大悲憫_ニ念末法_ニ爲_レ作_ニ津梁_ニ故。
- (二) 特於_ニ無量法門_ニ出_ニ勝方便_ニ故。
- (三) 激_ニ揚生死凡夫_ニ令_レ起_ニ欣厭_ニ故。
- (四) 化_ニ導_ニ乘執_ニ空不_ト修_ニ淨土_ニ故。
- (五) 勉_ニ進初心菩薩_ニ親_ニ近如來_ニ故。
- (六) 盡攝_ニ利鈍諸根_ニ悉皆度脫故。
- (七) 護_ニ持多障行人_ニ不_レ遭_ニ墮落_ニ故。
- (八) 的_ニ指即_ニ有念心_ニ得_チ入_ニ無念_ニ故。
- (九) 巧示_ニ因於往生_ニ實悟_ニ無生_ニ故。
- (一〇) 復明_ニ徑路修行徑中之徑_ニ故。

疏鈔の本文は更に是等を詳細に解説してゐるが中に就て第一の勝方便としては(一)佛世に值はずして常に佛を見

ることを得（二）惑業を斷ぜずして輪廻を出づることを得（三）餘行を修せずして波羅蜜を得（四）多劫を經ずして疾かに解脱を得るの四勝を示してゐる。此點よりすれば淨土の教説は正しく頓教の所攝であり兼ねて終圓二教に通するであらう。宏は其の教攝を説くに賢首の小・始・終・頓・圓なる華嚴の教判を用ひ、且つ其の嵩尙する所は多分に華嚴の圓教に存したことは否み得ざる所である。思ふに罪業深重なる凡夫が聖位に到達せんと欲するは甚だしき難事なるが故に唯だ持名念佛して速かに往生するの外に道はない。既に往生し終らば即ち不退の位に達し得るであらう。されば淨土の法門は漸教迂回のそれではなくして速得成佛の教説たり得るのである。是れ蓋し此の法門が頓教の所攝と判ぜらるる所以である。而して一切有情は念佛によつて成佛すること必定である。縱令一闡提たりと雖も成佛の可能が保證せらるるが故に此の法門は終教に通する所ありと言はるのである。更に蘇州曹魯川に答へたる文中にも存する如く、淨土の諸經は華嚴無量門中の一門であり、彌陀經は圓の少分を得てると判ぜらるる限り、淨土の法門は圓教にも通すと稱せらるのである。然らば其の理由は如何といふに阿彌陀經疏鈔^{*4}一卷は次の如く答へてゐる。

（一）華嚴器界塵毛、形無形物、皆悉演^三出妙法言音。

此〔彌陀經〕則水鳥樹林咸宣^三根力覺道諸法門^一故。

（二）華嚴一微塵中具^三足十方法界、無盡莊嚴^一。

此則如^三大本〔無量壽經〕云、於^ニ寶樹中^一見^ニ十方佛刹^ニ猶如^ニ鏡像^一故。

（三）華嚴不^レ動^ニ寂場^一徧^ニ周法界^一故云體相如^ニ本無差別、無等無量悉周徧^一。

此則如^ニ大本云、阿彌陀佛常在^ニ西方^一而亦徧^ニ十方^一故。

(四)華嚴喻藥王樹、若有見者、眼得清淨乃至耳鼻六根無不_二清淨、衆生見佛亦復如是。以下見圓覺佛聞普門法_上神力乃爾。

此則阿彌陀佛道場寶樹、見者聞者六根清淨故。

(五)華嚴八難超三十地之階。

此則地獄鬼畜但念佛者悉往生故。

(六)華嚴一即一切故、如來能於一身現不可說佛刹、微塵數頭、一頭出爾所舌、一舌出爾所音聲乃至文字句義充滿法界。

此則如大本云、彼國無量寶華、一一華中出三十六億那由他百千光明、一一光明出三十六億那由他百千佛、普爲十方說一切法故。

(七)華嚴舍那釋迦、雙垂兩相。

此則如觀經云、阿彌陀佛現六十萬億那由他恒河沙由旬之身、而又見丈六之身於池水上故。

(八)華嚴以盧舍那佛爲教主。

此則如清涼云、阿彌陀佛即本師盧舍那故。

(九)華嚴名不思議、淨名諸經名小不思議。

此則亦名不可思議功德故。

(一〇)華嚴爲教、即凡夫心便成諸佛不動智。

此則不_レ越_ニ稱名_一佛現前故。

上の如く華嚴と淨土の諸經とを比較するならば明かに後者は前者の流類であり、從つて淨土の法門は圓教に分属することが明かになるであらう。宏は華嚴の別教一乘の法を嵩尙しつつも尙ほ淨土のそれを高く評價してゐることは否定し難いであらう。即ち淨土疑辯には「此の淨土の法門は淺きに似て而も深く、近きに似て而も遠く、難きに似て而も易く、易きに似て而も難し」と述べてゐる。念佛は一般に（一）觀像（二）觀相（三）實相（四）口稱の四種に區別せらる。就中實相とは即ち自性天眞の佛を念ずるを指すのである。蓋し此の佛は生滅有空能所等の相を離れ、又言說名字心緣等の相無きが故にかく名くるのである。口稱は阿彌陀經に所謂「執持名號一心不亂」のそれを指すのである。而して宏は是れに明持、默持、半明半默持、記數持乃至不記數持等を數へてゐる。名號を執持するには先づ四障を離れねばならない。四障の一とは即心是佛の言を執する結果、己れの心念を捨てて他の佛を念ずるの要なしとなすことである。其の二は諸佛を念ずるは却つて偏倚なりとなすことである。其の三は若し佛を念ずる要ありとせば、何れの佛を念ずるも差支なく、必らずしも阿彌陀佛のみに限定する要がないであらうとなることである。其の四是若し阿彌陀佛を念ずるを要すとせば、其の功德・智慧・相好・光明等を念ずるも可なるべく、必らずしも唯だ名號を念ずるの要がないであらうとなすことである。併しながら罪業深く雜亂多き末法の徒は阿彌陀一佛の名號を執持することが最も勝方便であると主張する。觀像、觀相、實相の三念佛には自力的要素が多分に含まれてゐるが、口稱念佛は純粹に他力救濟を説く淨土教の趣意に徹せるものである。宏の淨業は右の四種に通する所あるは勿論であるが、併し實相觀相を基礎としつつ、口稱念佛をも行じたものと考へられる。蓋し四障の一を説くにも即心是佛と口稱念佛

との兩見を認容してゐるが如き不徹底さが看取せらるるのである。

却説華嚴と淨土とが密接なる關係を有することは上に述べたる宏の見解も勿論首肯し得るが、歴史的に見ても後者の發達が前者の思想的影響によることは實に多大である。殊に四十華嚴の第四十卷は所謂普賢行願品であるが是れには阿彌陀佛の極樂世界に往生することが強調せられてゐる。加之阿彌陀佛は華嚴の佛たる盧舍那佛の人格化したものと考へらるる點が蓋し少くないのである。是くの如き關係よりして從來華嚴に通じて淨土の信仰に篤かつた人も多く存するのである。

註 *1 繕藏一輯三十三卷二冊一七〇丁右以下 雲棲法彙六冊一九丁右以下

*3 淨土聖賢錄五卷 繕藏一輯二編乙一四五丁左 法彙三十冊一三丁左

*5 繕藏一輯二編十三卷二冊二〇一丁左 法彙十冊二丁右

*7 大正藏十二卷三四七頁

三冊二二二丁左

*2 繕藏同上一七四丁右 法彙同上三四丁左

*4 繕藏同上一七五丁右 法彙六冊三七丁左

*6 字井、支那佛教史一九九頁

*8 阿彌陀經疏鈔三卷 繕藏一輯三十三卷

*9 大正藏十卷八四六頁

〔三〕

株宏の禪に關する思想は其の著書の隨處に見出し得るが、禪を標榜したものは禪關策進二卷である。宏自身の序に從へば此の書の開版は明の神宗代萬曆二十八年（我が國の慶長五年皇紀西暦一六〇〇年）孟春に行はれてゐる。宏初め坊間に禪門佛祖綱目一帙を得て、古尊宿が自ら其の參學の時初め入り難く、中頃勞苦して工夫を做し、終りに廓爾

として大悟するの次第を知り、辨道の資料是れに過ぐるものなしとし、日夜愛誦して息まなかつたといふ。後に到つて更に五燈諸家語錄其の他集傳等を閲して益々參禪學道の要緊を識得し、自己の警策點檢に資するを得た。茲に於て其等の中より參學辨道の用心たるべき先人の垂誠勞苦の消息を集め、更に諸經論等の語句を引證して、繁を削り要を採り彙編して一冊子となした。是れ即ち禪關策進である。此の書は元來關なくして而も自ら重關の存する禪門を透過せしむべく、學人を警策し進出せしむる好簡の文献と言ふべきであらう。而して本書の開版されて後、雲棲法彙第十四冊中に收められたが我が國では明暦二年（後西天皇御宇皇紀二三一七年
西暦一六五七年）正月僧鐘岱によつて京都田原仁左衛門より初めて刊行せられた。其の後闡提老翁白隱慧鶴（皇紀二三四五年一二四二八年
西暦一六八四年一一七六年）は重刻の後序にも存する如く、修學時代に「嗟呼、佛法虛誕參禪實なし。僧や俗や我進むに期する所なく、退くに羞づる所あり」と稱して大いに懊惱したが、一日晒書の序、本書を手にし、「慈明錐を引いて自ら刺す」の章を見て志氣憤激し意を決して參學に精勵し、終生是れを愛讀し照心辨道の好伴侶となしたといふ。仍つ其の法嗣伊豆龍澤寺二祖東嶺圓慈（皇紀二三八年一二四五二年
西暦一七二一年一一七九年）が師の遺命に依て自ら後序を撰し、闡提老翁が特に此の書を敬重したる縁由を述べ、寶曆十二年（桃園天皇御宇皇紀二四二三年
西暦一七六年）四月重刻し京都小川源兵衛より出版した。尙ほ此の書の註釋として冠註本が存したと傳へられてゐるが、現今是れを見ることの出來ないのは遺憾である。蓋し此の書は鬱攸の災に罹り、板は鳥有に歸したといふ。併しその典據引用等は繁簡適中せず、魯魚の誤りも少くなかつたやうである。現今一般に擧げらるる註釋書は箋解である。此の書は天保七丙申年（仁孝天皇御宇皇紀二四九六年
西暦一八三六年）五月阿波の竺堯稽山が東源和尚の薦めにより、舊冠註本を訂正増補して京都柳枝軒より刊行したものである。箋解はこの書を理解するには最も良き文献たるの價値を失はない

いであらう。さりながら尙ほ多少の誤謬あるを免れない。予の見たる所より言へば禪闡策進自身にも引用や傳記の上に稍錯誤が存するやうである。

禪闡策進の前集は諸祖法語節要第一、諸祖苦節第二の二門より成る。第一門は筠州黃檗運禪師示衆、趙州諗禪師示衆より異巖登禪師釋疑集、月心和尚示衆に至る三十九章、第二門は獨坐靜室、懸崖坐樹より脇不至席、獨守鈍工に至る二十四章を收めてゐる。後集は惟だ諸經引證節略と名づけ、大般若經、華嚴經より法界次第、心賦註に至る四十七章を掲げてゐる。本書は殆んど資料の抜粹であるが、筠州、黃檗運禪師示衆、黃龍死心新禪師小參、徑山大慧杲禪師答問、蒙山異禪師示衆、天目高峰妙禪師示衆等三十九章に各評を附してゐるから宏自身の思想も大略窺ひ得るであらう。前集の第一間に於ける示衆、普說、小參、垂誠、答問等にも禪門の修行が如何に熱烈なるかの實例を見出し得るが、特に第二門は文字通りに生命を賭しての實參實究なることが明かに示されてゐる。

本書を中心として宏の禪に就て其の特質を述べるならば凡そ次の如くであらう。

思ふに禪は教理や思想ではなく、佛教精神の源底に徹して是れを我々の生活に具現するにある。大乘諸經典は禪の本質を捉へさせんとする文學的表現である限り、其等の底には禪の精神が脈々として流れてゐる。併し其等が文字言語に現はされてゐる以上、結局他家の寶を數ふるの觀なきを得ない。經典は畢竟月を指す指に過ぎない。されば禪は單に經説として與へられたものとしてでなく、自ら自己の問題として佛法の生命に生きんとするのである。茲に禪門が單なる佛語宗にあらずして、佛心宗たる所以が存するのである。佛心宗を標榜する禪は勢ひ佛とその本質を等しくする自性清淨心即ち佛性の全現に資する點を強調する。即心是佛といひ、生佛一如と稱し、乃至見性を重要視するは

蓋し是れに依るのである。見性とは本來人々本具の心性を徹見するの謂である。本書に現はるる禪風は特に見性悟道を高揚する。さりながら見性悟道は禪門の特質であるにも拘らず、其の度を過ぎたる強調は往々にして悟後の修行を等閑に附する弊を醸し易い。されば禪門には此の弊風を斥くべく無所得無所期の坐禪を説き、修證一等の打坐を示し作佛をも圖らざる門流も存するのである。見性本來の意味は右の如く禪の重要視する所であるが、其の本義を忘れて單に其れのみを過重する禪は却つて正鵠を得ざるものとなるであらう。見性の問題に聯關して次に看話に就て一言する必要が存する。蓋し本書には隨處に此の問題が説かれてゐるからである。所謂公案話頭なるものは古人の行履に託して現はさるる實例又は課題である。古來禪門では其の數千七百則が數へられてゐる。學人は是れによつて直ちに心地を究明し、本然の風光に接せんとする。元來公案なるものは先徳が己の生命を賭して參究した問題であるから、是れを依憑として禪の堂奥に入らんとすることは禪者としては極めて自然であると言はねばならない。是くの如く看話、禪は初心誘導には少なからざる意義を持つてゐるにも拘らず、是れが一般に流行するに到れば本來の意味が漸次沒却されて所謂梯子悟りの段階的手段に供せられ、妄心閉塞の具に用ひらるるであらう。従つて禪門本來の一超直入の頓旨は全く忘れられ、人格本位の自由さが失はれるのである。默照禪が是れと對蹠的に擧げらるる所以も蓋し茲に存する。さりながら默照禪と雖も、一步錯るならば所謂寒灰枯木の邪禪に墮する嫌ひが存する。故に學人は這箇の消息を辨へ看話禪本來の精神を把握して其の長所を發揮するならば、其れ自身存在の意義を有するに到るのである。本書が右の如く見性を強調し、看話を力説し、禪機を揮はんとする所以のものは其の擧げらるる古徳が多く南嶽の門流たる臨濟禪に屬するからである。尙ほ一言すべきは嚮に述べたる如く本書に載せらるる禪が念佛と甚だ接近し、禪淨相關

の宗風が隨處に見出され得る點である。一例を擧ぐれば師子峰天如則禪師普說、智徹禪師淨土玄門、天眞毒峰禪師示衆、楚石琦禪師示衆、楚山琦禪師解制、空谷隆禪師示衆、天奇和尚示衆、古音琴禪師示衆等の如き是れである。宏自身が禪淨雙修の人であることは前述の傳記に於ても既に觸れた所である。彼は淨土疑辯に中峰妙本が「禪者淨土之禪、淨土者禪之淨土」といへる言を擧げ「禪宗淨土殊塗同歸」と說いてゐる。而して阿彌陀經の大旨は自性^{*6}の彌陀、惟心の淨土を知るにありとなしてゐる。併し他面に於て淨土に往生せんことを求め、彌陀を見んことを願つてゐる。更に普勸念佛往生淨土文には往生淨土の後、始めて自心本來是佛なることを悟ると述べてゐる。かくの如く彼の信仰は確立されず、其の思想も亦矛盾してゐる所が少なからず存する。蓋し彼は禪淨一如を標榜しつゝ其の重點は寧ろ淨業にあつたのである。而して念佛も一面實相觀想を說きながら他面名號を執持すべきを勧めてゐる。念佛の功德を說いて此の一路は入理の妙門であつて圓かに五宗に契ひ、弘く諸教を該ぬとなし、又此の一行^{*8}は六波羅蜜を兼ね諸善萬行を具すと道破してゐる。故に彼は禪に徹底し得ずして寧ろ念佛に其の安住地を求めたと言はねばならない。されば禪關策進に擧げらるる禪僧にして念佛を行じた者も多數に上つてゐるのである。白隱慧鶴は本書に往生門の存するを嫌ひ一齊に削り去つて可なりと稱してゐる程である。蓋し獅子は鷹殘を食はず、猛虎は伏肉を喰はざるが如く、大力量底の漢は他の糟粕を嘗むるを潔しとしないからである。

註 *1 禪關策進序 大正藏四十八卷一〇九七頁

*2 禪關策進後序 大正藏四十八卷一一〇九頁

*3 禪關策進 大正藏四十八卷一一〇五頁

*4 禪關策進箋解三六丁右

*5 繢藏一輯二編十三卷二冊二〇〇丁右 往生集附 法華十六冊二丁左

*⁶ 阿彌陀經疏鈔二卷 繼藏一輯三十三套三冊一八五丁右 *⁷ 繼藏一輯二編十四套一冊六七丁左

*⁸ 淨土四十八願問答 繼藏一輯二編十三套二冊二〇〇丁右 佛示念佛十種功德文 往生集附 法華十六冊四丁右

*⁹ 阿彌陀經疏鈔一卷 繼藏一輯三十三套二冊一七一丁左 *⁹ 禪關策進後序 大正藏四十八卷一一〇九頁

〔四〕

株宏の如き禪者が淨業を勵んだといふことは聊か奇異の感を抱かしめるやうであるが、併し一度び支那佛教史を繙くならば、かかる例證は甚だ多數にのぼつてゐることに氣附くであらう。達磨以前は暫らく措くとしても、五祖弘忍の系統には早くも念佛禪に入つた人を見出しえるのである。宗密の圓覺經大疏鈔三卷の下には南山念佛門禪宗の一派を唱へた宣什を擧げてゐる。而して其の實修法を述べて「正授法時、先說¹法門道理修行意趣、然後令²一字念佛、初引³聲由念、後漸漸沒⁴聲、微聲乃至⁵無聲、送⁶佛至⁷意、意念猶麤、又送至⁸心、念念存⁹想、有¹⁰佛恒在¹¹心中、乃至¹²無想¹³益¹⁴得道」¹⁵とある。是れによつて見るに宣什の念佛禪は一種獨特のものであつたことが知られるであらう。更に圓覺經大疏鈔三卷の下、圓覺經略疏鈔四卷には弘忍の徒に智說を擧げてゐる。資川の智說は禪源諸詮集都序上卷一の所謂南侁であるが、彼も亦念佛禪に入れる人である。又牛頭山の第四祖法持も亦念佛を行じたことが、戒珠の淨土往生傳中卷に見出し得る。先の智說に學んだ法照¹⁶は南嶽彌陀和尙と言はるる人であるが、同じく念佛に入り著書として五會法事讚一卷が傳へられてゐる。六祖慧能に稍々後れて出世したる慈愍三藏慧日も亦禪淨二修の人であつたこと延壽の萬善同歸集上卷に明かである。又不空の譯場に列れる飛錫の如きも理事雙修の說を唱へ其の著念佛三昧寶王論下卷に於て

は「念佛三昧無上妙禪」と稱してゐる。百丈に念佛思想があつたと唱ふる學者も存するが此の點は明瞭ではない。降つて先に擧げたる延壽も亦一面宗鏡錄百卷を著はすと共に他面萬善同歸集六卷を記して念佛禪を唱へてゐる。彼は宗密等と同じく華嚴圓教を信じ、是れによつて説いたことも亦一般に知られてゐる。更に雪竇重顯の法嗣天衣義懷が念佛に心を傾けたことは道衍の諸上善人詠、濟能の角虎集下卷等によつて窺はれるであらう。されば其の徒中にも圓照宗本の如きは密に淨業を修したことが淨土賢聖錄三卷等に見えてゐる。天衣義懷の徒に長蘆應夫あり、應夫の門に宗頤出で又念佛行に傾いた。宗頤は禪苑清規十卷を著はした人であるが其の信仰は禪淨の二途に涉つてゐる。其の徒懐深慈受も同じく師道の祖述者である。更に黃龍下には死心悟新あり、曹洞下には長蘆清了あつて共に念佛淨業に力を致した。元代に入つては高峰原妙の法嗣中峰明本あり、佛儒を調和し教禪を融合し更に禪淨の歸一に力めた。宏が妙本の思想に關心を抱けるは前に述べた如くである。妙本の徒天如惟則は淨土或問を著はして、禪者に淨業の必要なる所以を力説した。元叟行端の門に楚石梵琦あつて華嚴一乘を崇信し、兼ねて往生淨土を願ひ、自ら西齋と號し念佛に心を傾けた。明代に到つて楚山紹琦は清了によつて始められた念佛公案を高唱し、阿彌陀佛の名號を提起して是れを懷抱に置き、以て悟由となしたのである。彼と同時代に空谷景隆出で「念佛²⁰一門、捷徑修行之要也」と述べ、阿彌陀佛に對する信心を以て本となしてゐる。又毒峰季善あつて一生苦修練行し、學人に念佛公案を附し、是れが提撕參究を勧めた。次で古音淨琴、笑嚴德寶等出世して共に念佛禪を鼓吹した。淨琴の念佛警策、德寶の淨土詩は這箇の消息を物語つてゐる。宏の禪淨雙修の宗風は時代の影響による事勿論であるが、併し其の修行時代に謁したる德寶の感化も亦見遁せないであらう。

かくの如く禪宗の興起と前後して現はれ、常に表裏隱顯して發達した念佛淨業は時の經過と共に、禪門と内面的にも深く關係し、遂に株宏の如き宗風を生むに到つたのである。思ふに禪淨相關には當時の世相や思潮が與つて力あることは言ふ迄もないが我々は更に内面的なる理由を討究しなければならない。元來念佛も原始的意味に於ては廣き禪定中に包攝せらるべきものである。阿含經に存する三念五念六念八念十念中の念佛 (Buddhanussati) は「正身正意、結跏趺坐して念を繋けて前に在り、他想あることなく、專精に佛を念じ、如來の形を觀じ、未だ曾て目を離さず、已に目を離さずして便ち如來の功德を念する」のである。小乘論部では法蘊足論二卷に四證淨を明し、佛證淨の下に隨念諸佛を説き、婆沙論百三卷にも佛法僧の三不壞淨が隨念建立なることを示してゐる。那先比丘經下巻には「人雖24有三本惡、一時念佛用レ是、不レ入ニ泥犁中、便生ニ天上」とある。更に禪祕要法經、坐禪三昧經、五門禪經要用法、思惟略要法等一群の禪經には五種の禪法を説き、念佛觀を擧げてゐる。就中思惟略要法は十種觀法を説き、觀佛三昧法、生身觀法、諸佛觀法、觀無量壽佛法を數へてゐるから、内容が著しく大乘化されてゐることに氣附くであらう。更に他面阿閦佛國經、大阿彌陀經、般舟三昧經、菩薩念佛三昧經、觀佛三昧經等が續出して念佛思想を豊富にした。かくして念佛三昧、見佛、般舟三昧、觀佛三昧、一行三昧といふやうに順を追うて發展したものと考へられる。念佛は初め釋尊を憶念したのであるが更に諸佛のそれに轉じ、是れが彌陀一佛に統一さるるに到つたのであらう。併しながら悉有佛性を根本思想とする大乘佛教に於ては觀佛三昧も禪定意識に現はれた生佛の對立であると見なければならない。而して觀佛三昧に於ては行者が悉有佛性の理を信じて、其の理想たる佛を觀念しつゝ、自己を彼の境地に引上げんと努力するところに眞實の意義が存する。けれども彌陀一佛に統一せらるる時は、觀佛三昧も口稱念佛となり、其の佛を自

性己心の上に見ずして客観的に嚴然と存在する佛身となるのである。かくせば凡夫は信を發し、名號を唱へ其の本願に縋らんとするのである。是れ淨土三部經等の説く佛である。禪と念佛は要するに我々人性の二方面を捉へて是れを強調したものである。従つて是等は宗教的生命の二大系統と言ふべきである。而して前者は自己に佛を見出して眞實に生きんとし、後者は自己の弱小無力を自覺して佛に攝取せられんことを期するのである。各々特色あつて甲乙の價值批判は不可能であるが、其の何れに就くかは人々の性分機根に依るであらう。前者は意志を強調して不退轉の努力を勧め、後者は人情の機微を捉へて聖なる宗教生活に安住せんとするのである。併し靈芝元照が樂邦文類五卷に於て「聽教參禪逐々外尋、未嘗廻々首一沉吟、眼光將落前程暗、始信平生錯用心」³¹と言つて禪家を罵れるは當つてゐない。さればとて天如惟則が「參禪爲了生死、念佛亦爲了生死、參禪者直指人心見性成佛、念佛者達惟心淨土見³²本性彌陀、既曰三本性彌陀惟心淨土豈有³³不同者哉」と言へる如く、參禪と念佛との同一を論ずるも亦兩者に徹せざる憾みが存する。而も念佛が單に本性の彌陀惟心の淨土のみにとどまらずして、客観的實在となすに於ては更に此の感を深くする。此の意味に於て祐宏の見解にも亦不徹底な點が存するやうに思ふ。併し此れを單に彼が禪に徹せざることのみに歸することは不可能であらう。時代の児たる彼も滑々たる當年の風潮に抗し得ず、自ら其の感化を受けたと見なければならぬ。又一面偽り難き人生の弱さを感じ、罪の深重を悟つたのである。併し彼が華嚴を嵩尚し禪との結合を試したことには一理存するやうに思ふ。華嚴經全體の主旨は註釋家の言ふ如く、重重無盡の緣起で一即一切、一切即一の緣起觀に徹底し、全一の佛教生活を高調するにある。かくの如き廣大なる法門も釋尊の海印三昧より流露したものであるとなす點は先づ我々の心を捉へるであらう。而も十地品に「三界虛妄但一心作、十二因緣分皆依心」とい

ふが如き萬法唯心觀は我々の言はんと欲する所である。其の清淨なる一心を高揚し、全一の生活を強調し、菩提心を重要視するはそのまま禪の要訣である。禪の思想は前に慧命、宗密、文益、延壽、梵琦等によつて華嚴流に言ひ現はされたが、禪の體驗内容を客觀化するには、自ら大乘思想の最高頂たる華嚴の表現法を取らざるを得ないのである。

是れを要するに株宏が教學の特色は戒律を復興し、華嚴に基いて念佛を高潮し、念佛に因んで禪定を實踐した點に存する。而して戒定慧三學を統一し、是れを具現するに自己の人格を以てしたと言はねばならない。併し乍ら思想的に見る限り、雜學雜信の赴く所、隨處に其の破綻を見出すことが出来る。其の鬼神の實在を信じ、天部の世界を肯定し、閻王の傳説を首肯するが如き、或は放生を以て治病の道と思考し、或は往生淨土の後、初めて自心是佛を悟るとなすが如き是れである。

終りに臨み株宏の著述遺稿等を擧ぐることとしよう。是等は悉く雲棲法彙三十四冊中に收められてゐる。又種類によつては縮刷藏經、續藏經、大正藏經等にも見出し得る。

○釋 經

梵網菩薩戒疏發隱（1）（2）（3）（4）續藏一輯五十九卷 同 附事義問辯（5）續藏一輯五十九卷

阿彌陀經疏鈔（6）（7）（8）（9）續藏一輯三十三卷 同 附事義問辯（10）續藏一輯三十三卷

同 附四十八問答（10）續藏一輯二編十三卷 大正藏四十七卷 同 附淨土疑辯（10）續藏一輯二編十三卷 大正藏四十七卷

佛遺經疏節要（11）縮藏調帙九冊 大正藏四十卷

○輯 古

諸經日誦（12）

具戒便蒙（13） 繼藏一輯二編十一套

尼戒錄要（13）

禪關策進（14） 繼藏一輯二編十九套 大正藏四十八卷

緇門崇行錄（15） 繼藏一輯二編乙二十一套

僧訓日記（14）

自知錄（15）

往生集（16） 繼藏一輯二編乙八套 大正藏五十一卷

皇明名僧輯略（17） 繼藏一輯二編乙十七套

水陸儀軌（18）（19） 繼藏一輯二編乙九套

施食補註（21） 繼藏一輯二編九套

同附處會品目總要之圖（22）

同附戒殺放生文（22）

○手著

楞嚴摸象記（23） 繼藏一輯十九套

竹窗隨筆（24）

竹窗三筆（26）

直道錄（27）

山房雜錄序跋記疏說
贊偈頌銘詩歌（28）（29）

同附西方願文略釋（11） 繼藏一輯二編十三套

沙彌律儀要略（13） 繼藏一輯二編十一套

誦戒儀戒（13）

同附勸修淨土三章（16）

續武林西湖高僧事略 繼藏一輯二編乙七套

施食儀軌（20） 繼藏一輯二編九套

華嚴感應略記（22） 繼藏一輯二編乙七套

放生儀（22）

同附戒殺放生文（22）

同附諸經（23）

竹窗二筆（25）

正訛集（27）

遺稿
書答問 摘答 雜答
開示 警策 補遺 (30)(31)

同附囑語 (32)

雲棲共住規約四集 (32)
雲棲紀事 (33)

其の他雲棲大師塔銘附祭文偈贊 (34) が存する。

註 *1 繼藏一輯十四套三冊二七九丁右

*3 繼藏一輯十五套二冊一三一丁左

*5 大正藏五十一卷一一九頁

*7 大正藏四十八卷九六三頁

*9 繼藏一輯二編乙八套一冊五二丁左

*11 繼藏一輯二編乙八套二冊一二七丁右

*13 西舫彙征上卷 繼藏一輯二編乙八套三冊二四五丁左

*15 歸元直指集上卷 繼藏一輯二編十三套二冊一三六丁左

*17 大正藏四十七卷二九二頁

*19 皇明名僧輯略 繼藏一輯二編乙十七套三冊二二三丁右 法彙同上一九丁右

*20 同上續藏一輯二編乙十七套三冊二〇七丁右 法彙同上一九丁右

*21 同上續藏一輯二編乙十七套三冊二〇五丁右 法彙同上一八丁左

*2 同上二七七丁左

*4 大正藏四十八卷四〇〇頁 佛教大系批判部四頁

*6 欽定全唐文五百八十七卷九丁右

*8 大正藏四十七卷一四三頁

*10 繼藏一輯二編十四套一冊二七六丁右

*12 淨土簡要錄 繼藏一輯二編十三套二冊一〇六丁左

*14 繼古尊宿語要一卷 繼藏一輯二編二十三套五冊四三〇丁左

*16 幻住菴清規 繼藏一輯二編十六套五冊五〇〇丁左

*18 淨土聖賢錄五卷 繼藏一輯二編乙八套二冊一四一丁右

*22 淨土聖賢錄五卷 繼藏一輯二編乙八套二冊一四一丁右

- *22 同上續藏一輯二編乙十七套三冊二一六丁右 法華同上五六丁右 *23 蓮邦詩選 繼藏一輯二編十五套四冊三一一三丁左
- *24 增一阿含二卷 大正藏二卷 五五四頁 *25 大正藏二十六卷四六〇頁
- *26 大正藏二十七卷五三四頁 *27 大正藏三十二卷七〇一頁
- *28 大正藏十五卷二九九頁 *29 大正藏十三卷九〇五頁
- *30 大正藏十五卷六八八頁 *31 繼藏一輯二編十二套五冊四八二丁右
- *32 天如惟則禪師語錄二卷 繼藏一輯二編二十七套五冊四一五丁右 *33 繼藏一輯二編二十七套五冊四一五丁右
- *33 大正藏九卷五五八頁 te cittamatratraidhātukam otaranti. api cālhabhāvāṅga iti dvādaśa ekacitte. Rahder; Dasabhlhūnika
sūtra et Bodhisattva bhūmi. p.49